

# THESIS

HAGA LAB.

TAKAHASHI LAB.

OMIYA LAB.

IHARA LAB.

AMANO YUMEKA

KOBAYASHI YUKA

MOCHIZUKI MIKU

OHASHI MISAKI

OSAWA NANASE

SUZUKI KAHO

# 遊んで学べる電子玩具の研究

教育美術

木、電子部品、プラスチック

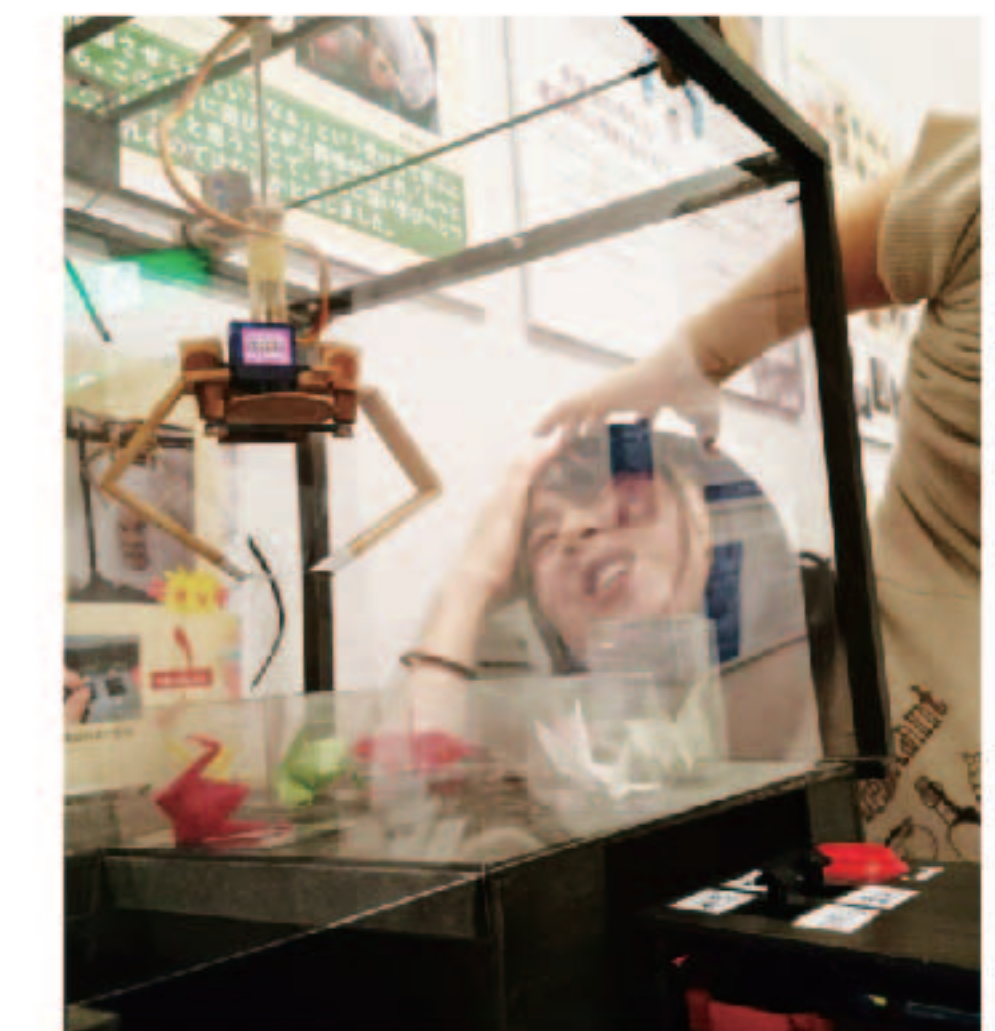


天野 夢香  
Amano Yumeka

教育学部

面白いことが好きな人です。

UFO キャッチャーと  
神社の参拝方法が学べる  
電子玩具を作りました。



# 絵本のキャラクターを軸とした鑑賞の可能性

—『にじいろおひれのルーカ（絵本・玩具）』の制作と鑑賞—  
論文

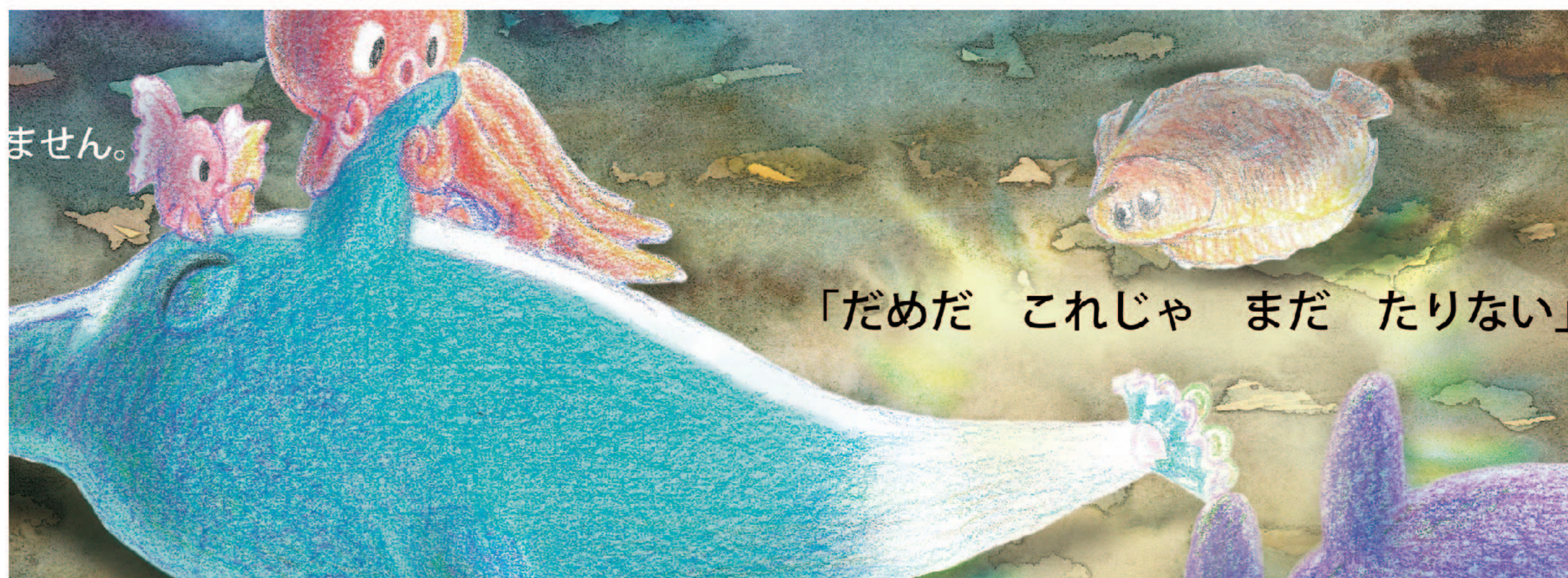


小林 由佳  
Kobayashi Yuka

教育学部

絵本をめくり、キャラクターに心を重ね、子どもたちは自分を見つめ直していく。

『にじいろおひれのルーカ』の絵本および玩具の開発は、技術教育の研究室である、松永研究室と協働で開発しました。制作にかけた期間は約2年です。絵本では、怒り、恐怖、悲しみなど、マイナスに捉えられがちな感情表現もストレートに表現することで、子どもたちの情操を育めるよう作りました。玩具では、子どもが大人と一緒に制作することで、構造や仕組みへの興味を持たせるとともに、ルーカは泳ぐことが好きだと直感させるものになっています。



# 静岡の模型と 美術教育の可能性

論文

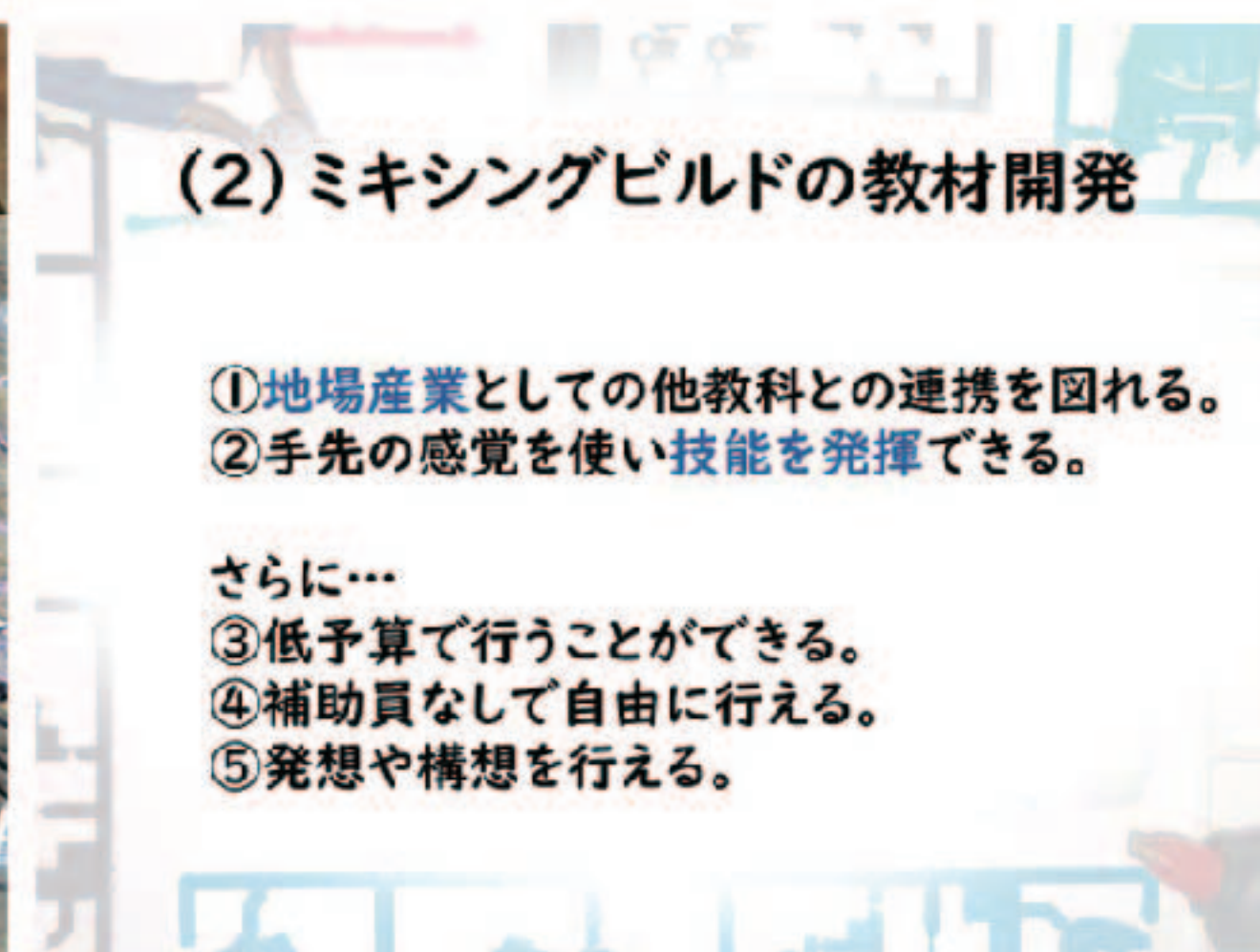
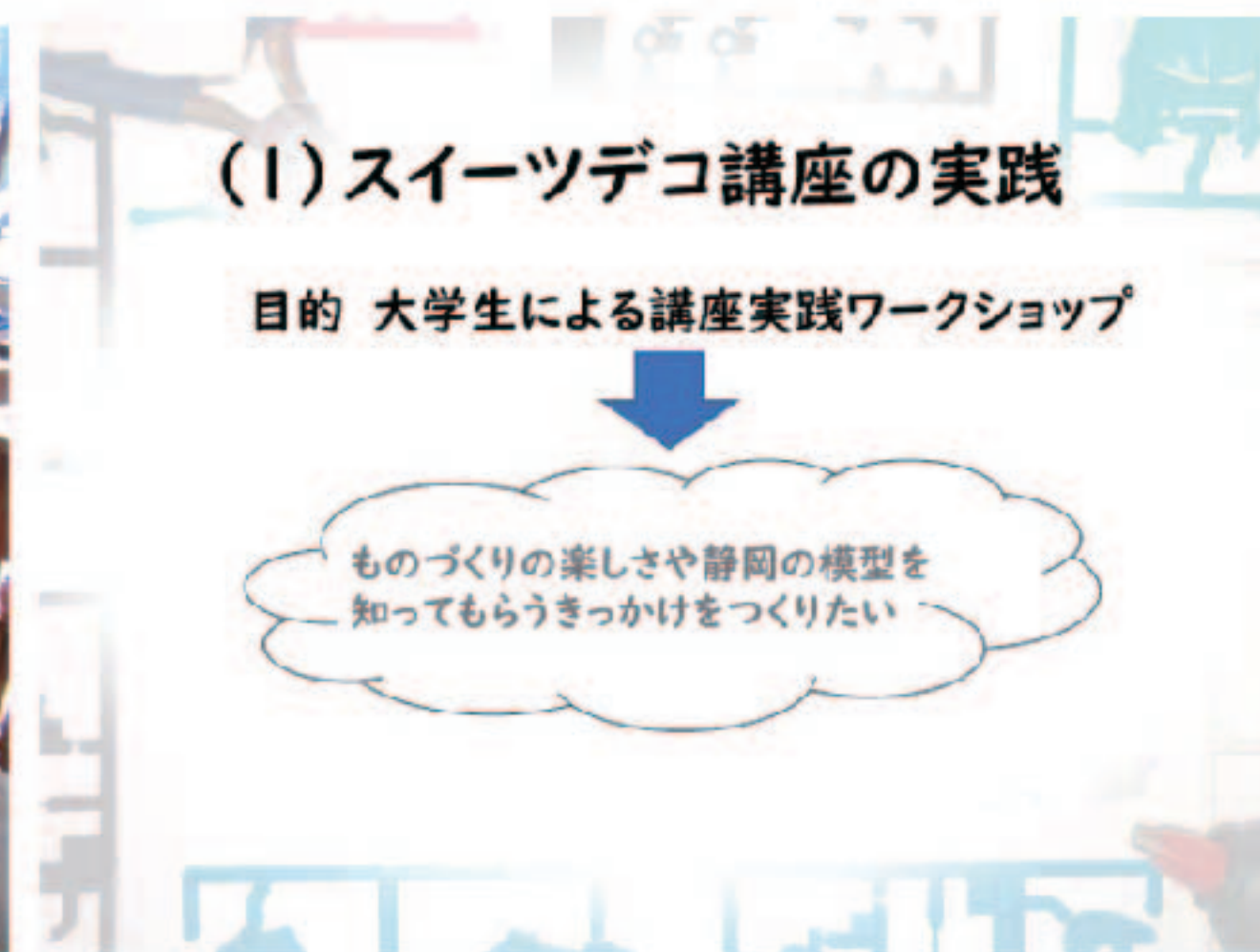
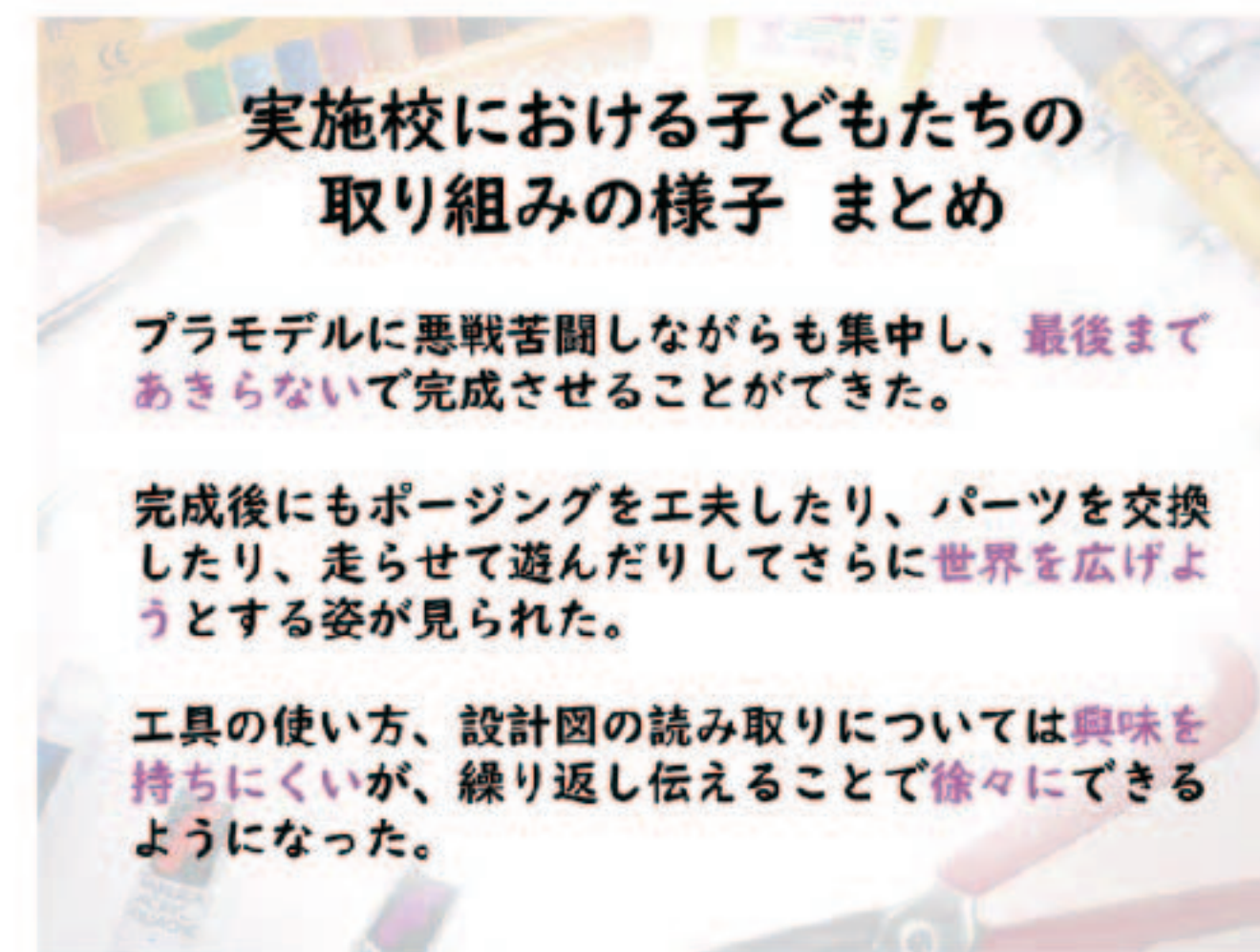


望月 美玖  
Mochizuki Miku

教育学部

静岡市でつくられるプラモデルは全国一位の出荷量を誇り、「模型の世界首都」として海外にもたくさんの商品を輸出しています。

本研究では、静岡の模型を学校教育に取り入れていくために数多くの授業を行いました。子どもたちの楽しく学ぶ姿から、模型の教育的価値や可能性を見つけることができました。



# 図画工作における苦手意識を改善するための題材研究

—現代美術に触れて変わる固定概念—

論文



大橋 美咲  
Ohashi Misaki

教育学部

図画工作科を苦手としている子供達の固定概念を覆し、上手い下手で評価される科目ではないということを伝えます。現代美術の題材化による壁を超え、子供につけたい力を明確にしながら苦手意識改善のための題材研究をしました。

### 図画工作科における苦手意識を改善するための題材研究 —現代美術に触れて変わる固定概念—

30614506 美術教育専修 大橋美咲

**【問題意識】**  
小学生が高学年になるにつれて“上手い絵”というものを認識し始め、少しずつ図画工作科に対する苦手意識を感じ始めていることに問題意識を持った。また、こうした考えが子どもの図画工作科に対する見方・考え方を狭めていると考えた。

**【研究目的】**  
広い視野で試行錯誤し表現する力を子どもに育成する為に、苦手意識が芽生え始める高学年を対象として鑑賞と表現を相互に関連付けた題材研究に取り組んだ。題材として現代美術を用い、その可能性を探っていった。

**【研究方法】**  
以下の①～④の方法で研究に取り組んだ。  
①先行研究や造形教室分析（子どもの実施把握） ③題材提案  
②教科書研究（現代美術の題材の実態把握） ④題材実施

### 子どもや教員の苦手意識の実態

先行研究と著者が参加している造形教室での経験から考察した。結果として、小学校4年生以上14%に苦手意識があること（右図）、教員にも図画工作科に対する苦手意識は存在していること、現代美術に対する認知は低く、授業での題材としての取り扱いが少ないことが明らかになった。

子どもや教員の苦手意識の実態

子どもや教員の苦手意識を改善し、教員も取り組みやすい題材が開発出来れば、図画工作科でつけた力をより育てることが出来ると思う。

### 題材の特徴

- 現代美術を鑑賞
- 表現と鑑賞の一体化
- 小集団での活動
- 対話の重視
- 思考のプロセスの可視化

題材開発や授業づくりの特徴を左に列挙した。この5つの要素を重視した。以下の図は、授業の流れを示したものである。鑑賞後、表現に取り組む。その過程で、他者との対話や新たな気づきを重視する。

### 現代美術の題材としての可能性

現代美術を用いた題材の可能性について考察した。コンセプトを重視する現代美術を題材として用いる事は、子どもが対話を通してこれまでの狭い価値観を変化させる可能性があることと分析できた。また、方法としては対話やワークシートを用いた。

提案したワークシート（左下導入時に使用）は、他者の見方・考え方を共有する形式になっており、さらに作品鑑賞における子どもの思考の流れが視覚的に理解できるよう工夫した。

### ワークシートの利用

（奥野及びみとの時）

表現においても、思考のプロセスが見えるようにアイデアスケッチだけでなく、コンセプトを整理しながら制作に取り掛かれるよう工夫した（左・ワークシート）。

子ども同士での作品鑑賞においては、つくる前と後の思考の変化が分かるようにした（左・ワークシート）。

※記入例は著者が制作したもの

### 成果と課題

本題材を小学校4・5・6年生（3名）を対象に実施した。子どもは普段作品を制作するときに考えていなかったコンセプトを考えることに初めは苦戦していた。しかし、対話やワークシートを用いて鑑賞に取り組むことで、作品に込められたコンセプトをどのような視点から考えていけばいいのか視野を広げることが出来たと考える。さらに、他者の意見を聞くことでもの見方・考え方を広げることが出来た。

課題としてはコンセプトが込める想いだけにとどまり、使う材料の工夫がコンセプトと離れてしまうことである。文字や言葉で考える時間だけでなく、制作中も自分の込めたコンセプトと関連付けながら、自己との対話を生み出させたい。授業の中で紹介する参考作品や参考ワークシートを用いて子どもが何を考えていけばいいのかより明確にする必要がある。つまり、教員の指導・支援が重要になってくる。子供の意見を引き出すように机間指導などに力を入れていきたい。

また、本研究を通して現代美術を扱う際にはしっかりと題材研究を行うことと、校種を超えたカリキュラムの検討なども必要になってくること分かった。



# 静岡の土産物の特徴 —なぜ「お茶」よりも「うなぎパイ」がヒットしているのか—

アートマネジメント



大澤 七彩

Osawa Nanase

地域創造学環

現在、全国的に観光や観光土産によって地域活性化を目指す都市が多い中で、土産物の「無個性化」が発生し地域性を持つ商品が失われつつある。このような土産物の現状を踏まえた上で静岡の土産産業の今はどうなっているのだろうか。静岡市の土産産業は「知名度」の高いありきたりな商品ばかりが売れているのではないかと、という仮説のもと、購入者にアンケートを取り土産物に対する意識調査、購入物調査を行い、静岡土産に現在求められているものや今後発展していくためのポイントについて数値的に分析していく。



# 全国に広がるクラフト市 —松本、青森、静岡を例として— アートマネジメント



鈴木 夏帆  
Suzuki Kaho  
地域創造学環

近年日本各地で行われているクラフト市の変遷と現状を整理した。

第一章 クラフト市の先駆け クラフトフェアまつもと

第二章 クラフト・ハンドメイドブーム

第三章 クラフト市の展開

第四章 クラフト市の比較・分類

第五章 継続していく上での課題

調査方法：文献資料、現地調査、ボランティア参加、インタビュー

